

## 木から落ちたサルは

自民党をぶっ壊すと絶叫し、さっそうと登場した小泉首相もまもなく退陣。昨年九月の「郵政民営化」と銘打った総選挙では、小泉チルドレンとよばれる多くの新人代議士が誕生しました。派閥には属さずに議員活動をするということでマスコミも当初はもてはやしましたが、あれから一年。次の選挙を考えてか、足場が弱く、地盤・看板・かばんも不十分な新人議員さんのかなりは、結局は派閥に属したようです。小泉総理の後継者については、さらに改革を進めるためにはいっきに若手が、いや、行き詰っている東アジア外交の打開にはベテランでないとだめ、いやいや、この時代こそ財政の舵取りはわたくしが、と年明け早々からやかましい次第です。一方、「ライブドア問題」や「耐震偽装事件」で窮地に立たされた自民党を「偽メール事件」で助けてあげた民主党は、議員辞職する、いや、しないというドタバタ劇の末に、政権交代こそが真の構造改革とぶちあげる元自民党幹事長を党首として、豪腕といわれるその手法に頼って党の再生を目指しました。千葉七区の補欠選挙の結果を受けて、豪腕政治家の復活といったところでしょうか。

多くの議員は代議士になったからには総理大臣を目指したいといえます。しかし、人間というものは生涯もって生まれた器量に支配されていて、歳をとってもだめなやつはいつまでたってもだめ。しかも才能と意欲だけでは絶対に成功しない。超一流はたいがい最初から自他ともにそう認める存在を感じさせ、周りの人間が結果として押し戴くような雰囲気を作っています。政治の世界でも同様で、吉田茂、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、あるいは後藤田正晴といった歴代の総理・副総理には、好き嫌いは別として、それらしき魅力、政治家としてのカリスマ性がそれぞれに備わっていました。また、これらの総理大臣にはそれぞれに相応しいテーマがあり、吉田茂は日米講和条約の締結、岸信介は安保改定、池田勇人は所得倍增政策、佐藤栄作は沖縄返還、田中角栄は日本列島改造と、すぐに指折り数えることができます。

昭和三十八年十月二十三日、ときの首相池田勇人は衆議院を解散しましたが、その直後に本会議場から控室へ引き揚げてきた自民党議員を前にして万歳三唱の音頭をとることになった大野伴睦副総裁は、「前代議士諸君」と呼びかけると、「サルは木から落ちててもサルだが、代議士は落ちればタダの人」とつづけ、「当選したらまた会おう」で締めくくったそうです。代議士が選挙で落ちれば、とたんにそれまでの自分はなくなってしまう。いくらベテランでも落ちては話にならない、というのが現職政治家の立場にたった考え方であり、政治家にとって選挙がいかに決定的なものであるかを端的にあらわした言葉でしょう。タダの人になってはたまらない。必死に勝とうとする。それが政治家の心身に張りを与え、また活力にもなるのでしょうか。政治家は概して若々しく見え、高齢の方でもあまり年齢を感じさせない人が多いようです。長寿なのはめでたいが、いつまでもがんばっていられたのでは後がつかえるというので、世代交代や定年制がもち出されます。このような抗争も政治家の活力源なのでしょうか。

最近の代議士の顔をみると、水戸黄門にでてくる「越後屋」がよく似合う面構えのひと、顔が全部のっぺりしていて生活臭が感じられない人が目立ちます。後者にはとくに二世・三世議員が多い。即席栽培だからでしょうか。

「政治屋」ではなく「政治家」が育つにはとにかく手間とひまがかかるようです。